

vol.
14

しんどさんこばなし



一步先の「新どさんこ」を
新どさんこ研究所
山岸所長が訪れる

本がつくりだす
これからの北海道



新どさんこ

#14

荒井 宏明さん

1963年北見市生まれ。書店員、新聞社を経て、札幌市内で編集事務所を経営。路地裏探訪マガジン「季刊・札幌人の元発行人。北海道の読書環境悪化を懸念する図書関係者や教育関係者と共に、2008年「北海道ブックシェアリング」を設立。

「書を持って町へ出た」
どさんこ読書家

広大な大地 北海道。都道府県の魅力度ランキング10年連続一位という名譽の陰には、読書環境のレベルがワーストクラスという不名誉な実態がある。そんな北海道にも、寝食を忘れて本ばかり読む少年が一人。北見市に誕生した荒井宏明さんは、幼少の頃から両親が心配するほど本を読む読書家だった。読書三昧の学生時代から書店員、新聞記者など活字にまみれた経歴を経て、2008年「北海道ブックシェアリング」を設立。公共の図書施設や学校図書館の整備や運営のアドバイザーなどを手掛ける。

「読書環境の整備を専門とするNPOが動くことで、教育や図書に関わる個人や団体、機関も活気づくはず」

荒井さんのオフィスの壁に掛かる北海道の地図には青い付箋がびっしり。訪れた自治体に貼った、荒井さんの奔走の軌跡だ。

インフラとしての図書

整備する大人たちの責任

読書環境の整備という荒井さんの活動はさまざま。収蔵図書の老朽化に悩む小中学校に読み終えた本を無償で提供し、本を積み込んだ車を無書店の町まで走らせる「走る本屋さん」を開店。商店街では本のまつり「ブックストリート」を開催するなど、道内中を飛び回る。

「本は娯楽的な役割だけでなく、人生のさまざまな場面に必要な知識を提供してくれます。その町の10年、20年後を左右するような知的基盤の役割があるんです。自分たちが暮らす町に誇るべき読書環境があるというのは、とても大切なことです」

こういった環境の中でも、道内の子どもたちの読書意欲は全国平均か、それ以上というデータも。読書環境の整備は大人の責任と、解決に向けて進む荒井さんは誰よりその先頭に立ち続けている。



地元の10年後の魅力的な姿がイメージできている

北海道民は26%
北海道民の地元意識はこちら

<http://shindoken.com>

新ど研

新どさんこ研究所

インタビュー

新どさんこ研究所 所長

山岸 浩之

Hiroyuki Yamagishi

2014年北海道博報堂入社。

コミュニケーション戦略局長兼マーケティング部長として、北海道の様々なクライアントの戦略立案やリサーチを担当。

